

私たちのドイツ留学体験記

その他のタイトル	Unsere Erlebnisse in Deutschland
著者	山本 祐菜
雑誌名	独逸文學
巻	63
ページ	127-129
発行年	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018679

私たちのドイツ留学体験記

山本祐菜：ザーレ河畔のハレ滞在記

ドイツの東側、ザーレ川沿いに Halle (Salle) という小さな大学町があります。私がこの町を口で説明するときは必ず、「首都ベルリンの南側の観光地ライプツィヒ、その西隣にある町」と言っています。そんな小さな町に2017年9月から翌年2月までの約半年間、私は語学留学をしていました。大阪で育った私にとってハレは非常に暗く、寒く感じました。午前8時から始まる授業の為に毎朝早起きして学校に通っていましたが、その時間帯にまだ太陽は上っておらず、午後5時にはすっかり星が出ていました。太陽が一番高く上っている時も夕方のように、どこか晴れやかさが欠ける気持ちを抱いていました。冒頭からこのような書き出しでは、私の留学生活が暗く、重く、面白みのないものに聞こえるかもしれません。しかし、そのようなことは決してなく、ドイツでの経験、出会いはこれらを払拭するほど楽しく、温かなものでした。あの年にハレに留学できたからこそあった出会いや、経験を少し書いていきたいと思います。

まず私が通っていた学校で驚いたことです。私はハレにある大学で授業を受けていたのではなく、大学付属の語学学校に通っていました。ドイツ人は先生と事務の人だけで、周りは全員ドイツ以外の国籍をもつ人たちでした。その多くは移民としてドイツに移ってきた人たちで、ドイツで仕事を得るためにドイツ語を勉強していると言っていました。彼らは移民の申請をしていた為政府の補助を受けて学校に通うことができていると知った時は、彼らを受け入れ続けている政府の体制がしっかりとしていることに驚きました。移民と聞くと母国の紛争から逃れてきた人々を連想してしまいがちでしたが、共に半年間学んだ仲間たちは「仕事を得る」という目標をもって一生懸命な人たちでした。彼らの中の数人とは現在も SNS でやり取りを続けている大切な友人です。

語学力が近い人と会話を重ねることで話すことに自信を持つことができますが、自然なスピードで会話をするにはやはりドイツ語を母語としている人々と話すことが必要だと感じていました。そこで私は語学学校の手伝いをしていた学生に相談しました。彼はハレにある大学の日本学に所属している学生で、私をもっとドイツ人と話がしたいと相談すると、**Stammtisch** と呼ばれる日本学の学生の集りを紹介してくれました。週に一回のその集まりでは最初、話を聞くことだけに集中していてなかなか会話に混ざることができませんでしたが、ゲームをしながら思わず出てしまうドイツ語の一言などを知る良い機会となっていました。**Stammtisch** では色々な出会いがありましたが、なかでも一人の女性との出会いはその後の留学生生活をより良いものにしてくれました。彼女とはお互いの母語（ドイツ語と日本語）を教えあう **Tandem** パートナーとして週に一、二回カフェで過ごしていました。互いの趣味など他愛のない会話や試験の為の練習をし、私の帰国前には一緒に日帰り旅行に行ったりもしました。

ハレで出会った人の中に日本人もいました。彼らとも貴重な経験をすることができました。ハレには **Gedenkstätte ROTER OCHSE** という場所があります。ナチス、そして DDR 時代に軍や警察が使用していた施設を記念館として残し、そこで起こった出来事や歴史を後世に伝える為の施設です。ナチスや DDR はそこを収容所として使用し、時には処刑場としても利用していたそうです。第二次世界大戦時代の日本にも憲兵という存在がいたことは歴史を学ぶ上で必ず教わることですが、彼らが逮捕した人物に対して実際どのようなことを行ってきたかについて深く学ぶことはありません。しかしハレのこの施設は一般公開されているだけでなく、地域の小学校の校外学習の場としてよく利用されているそうです。展示物はなるべく当時のまま再現されており、それぞれの時代の重い空気を少しずつ感じることができました。日本の記念館が「戦争ではこのような被害に遭いました。こうならないために戦争を二度としてはいけません」と嘆いているのに対して、ここでは「あの時代この場所ではこのようなことが起こっていました。このようなことを再び起こしてはいけません」と伝えているように感じました。この施設を訪れる切っ掛けをくれた日本人はそこで **Praktikum**（実習）をしていました。

Praktikum の集大成として友人を集めての発表会を開くと聞き、私も参加しました。彼女に施設内を案内してもらった後、参加者全員でドイツと日本の記念館の違いについて長く討論していました。そこでは母国を戦争責任を負う国として考えているか、戦争で被害を受けた国として考えているかの違いがあることを感じました。同じ敗戦国でも戦争を起こした国として責任を負い続ける義務があるという考え方に触れ、日本の平和教育について考えさせられました。留学の際は異文化理解が深まるとよく言いますが、この経験はそれとはまた別の特別なものだったと思います。

留学体験の話を知ると、人に恵まれ助けられたことや自分自身が成長できたという話をよく聞きます。私の話も同じようなことを書いているかもしれませんが、このエッセイの話を持ち掛けて頂いた際、「関西大学の認定留学制度を利用して、初めてハレに留学した人物として、今までとは違う面白いことを書いてほしい」とお話をいただいたのでその意向に沿うことができているのであれば嬉しいと思います。